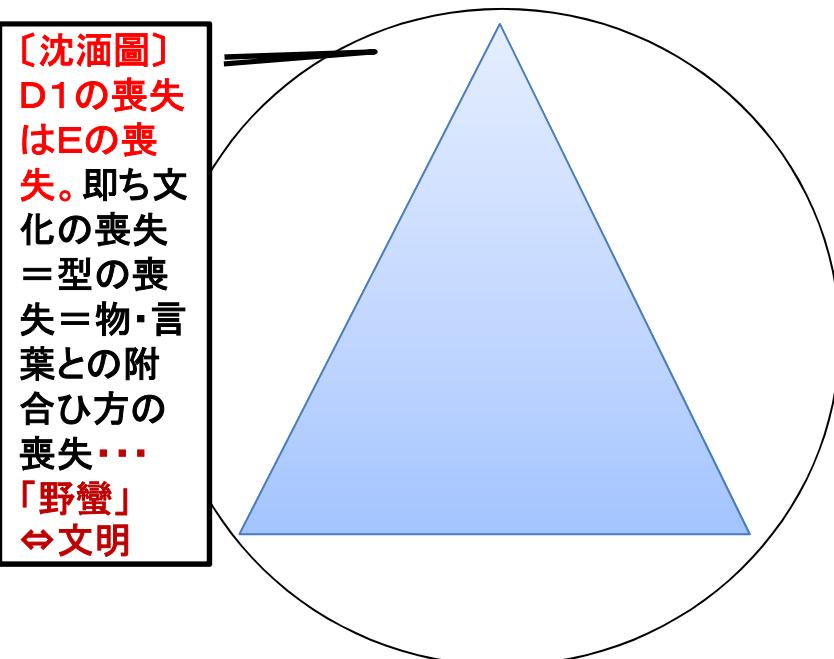


「物(左圖)」と「生き物として附合ふ(右圖)」との違い。「大事な事は物(F言葉:○圖)を生き物として附合ふ事である」(『人間國寶』序)により。

何故ならば、場から生ずる「關係(D1)」と稱する實在物は潜在的には一つのせりふ(言葉)によつて表し得るからである。故にせりふの力學、換言すればせりふ(言葉・物)との附合ひ方、扱ひ方。即ち「フレイジング」「So called」「型・仕來り・生き方・様式」の用ゐ方の適不適で、「距離の測定」即ち、場との關係(D1)の適應正常化(非沈湎)をさせる事が可能となり、また反対に適應異常化(沈湎)に陥らせる事にもなり得る。「Eの至大化=D1の至大化」と言ふ事になる。

\* 以下圖は人間(△圖)が物(F・言葉・○圖)に呑み込まれ「物との附合ひ」の距離感(E)を喪失してゐる状態。「物が單なる物にしか見えない」状態。

\* 「物が單なる物にしか見えない様では、人もまた物にしか見えない」



\* 下圖は、「物(F・○圖)を生き物として附合ふ」即ち、「生き物として」と言ふ、「So called」化、「Eの至大化=自己と言葉(物)との距離の測定」が出來てゐる状態。

\* 「自己と言葉(物)との距離の測定が出来る」とは「言葉(物)を自己所有化する」と言ふ事。即ち、意識度を高くし、言葉(物)の用法に細心の注意をし、「言葉(物)を自分から遠く離す事によつて、逆にその言葉を精神化し、支配、操作する事が出来る様になる」(P391全七)。さうする事によつて「自分に近付け、言葉を物そのものから離して自分の所有にする事が可能になる」。

